

+ 17 【じゃこつ】

蛇だけではなく、鰻（うなぎ）も穴子（あなご）も泥鰻（どじょう）も、ぬるぬるして長いものほとにかく嫌いでした。

だからもちろん、そんな不気味なものを食べたことはありません。

でも村では、鰻や穴子や泥鰻はもちろん、いやそれらよりずっと、蛇を食べる習慣がありました。

その食べ方もだんぜん嫌いで不快でした。

見たこともないし、見る気もありませんから、懐爺にきいた話を紹介します。

「生きた蛇を、大鍋に入れます。七人家族でしたら、七匹ですね。水を入れて、醤油と味噌を入れ、強火で煮るのです。重しをした鍋の蓋には、あらかじめ、七つの極めて小さな穴を空けておきます。煮立ってきますと、さすがに中の蛇が悶え苦しんで、ひどく暴れます。そして沸騰しますと、七匹の蛇はたまらずに、鍋の蓋の七つの小さな穴から、一斉に物凄い勢いで飛び出します。当然のことに、鍋の外に飛び出すのは、穴のところで肉が削がれて、骨だけになった蛇なのです。それで美味しい蛇鍋の完成、というわけです」

「ざんこくじゃのう」

ぼくは吐気がしました。

「人間は世界中で最も残酷な生き物です」

懐爺は断固たる口調でいいました。

「泥鰻なども生きたまま、丸ごとの豆腐と一緒に鍋で煮ます。煮立ってきますと、泥鰻たちは豆腐の中に逃げ込みます。沸騰すると、泥鰻豆腐の完成です。こいつが好きな連中は沢山います」

「わしはそんなものは、しんでもくわん」

「でも金ちゃん、わたしらは知らぬうちに、そういう残酷料理を食べる羽目になっているんですよ」

あれこれ思いだせば、そうかもしれない。

「たしかににんげんはざんこくじゃ。どうぶつはりょうりをせんからのう」

「はい。料理というものが、すなわち残酷なんです。それなのに、自分

は一流の料理人だと、威張っている莫迦が多すぎるんです」

一流の料理人の料理を食べたことはないが、そうかもしれない。

「それにしても、ほねだらけになったへびが、ばけてでんかのう」

「さすがは金ちゃん。でますでます、【じゃこつ】」

なんだか懐爺は嬉しそうでした。

「【じゃこつ】たあ、へびのほねのことかい」

「そうですそうです、おそろしやおそろしや、蛇の骨のおばけ」

こつこつこつこつ

じゃこつこつこつ

こつこつじゃこつ

こつじゃこつじゃ

こつこつこつじゃ

そんな音がきこえたら、【じゃこつ】の登場だそうです。

「【じゃこつ】ににらまれたら、どうなるんじゃ」

「金ちゃんは蛇など食べませんから問題ないんですが、蛇鍋を食べてばかりいる者には、いずれこの音が必ずきこえます。きこえるやいなや、その者の肉は消滅し、骨のみとなります」

「かそうばが、いらんのう」

おそろしい話ですが、自分には関係ないので、ぼくは呑気でした。

でもある日あるとき、そんな音がきこえて、ぼくは震え上がりましたが、それは按摩（あんま）さんの杖の音なのでした。